

謹賀新年



デア ハーフエン Der Hafen

Nr. 73
2025年1月-3月

ドイツ製造業の低迷と日本への示唆

横浜日独協会会長 成川 哲夫

ドイツでは、2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻後、ロシアからの天然ガス供給が停止したため、エネルギーコストが急騰した。このエネルギー危機は、ドイツの産業構造に大きな影響を与え、製造業を中心とした経済全体の競争力を低下させる要因となっている。さらに、ドイツは既に原子力発電を停止しており、代替エネルギーへの転換が十分に進まない中、産業用電力価格がヨーロッパ主要国の中で最も高い水準に達している。この結果、ドイツ製造業は海外移転の動きを強めており、国内経済に深刻な影響が及んでいる。

(1) ドイツ製造業の現状

ドイツの鉱工業生産指数は2023年以降低下傾向が続き、ウクライナ侵攻前の水準を5%程度下回っている。特に、エネルギー消費の多い化学や鉄鋼などの業種で生産の落ち込みが顕著である。また、エネルギー価格の高騰により製造コストが増加し、企業の収益は悪化している。産業用電力価格は、過去の平均的な水準の2-3倍程度に高止まりしており、国内生産のコスト競争力を大きく削ぐ要因となっている。



2024年前半時点で、ドイツの産業用電力価格は1キロワット時あたり0.25-0.30ユーロと、他の欧州主要国に比べて顕著に高い水準である。これにより、国内での生産活動が抑制され、設備稼働率も大きく低下している。ドイツ商工会議所の調査によれば、2023年に国内生産規模を縮小または拠点移転を検討している企業の割合は全体で37%、エネルギー多消費企業で45%に及んでいる。さらに、化学や自動車といった主要産業では海外移転の動きが進んでおり、雇用削減の動きが加速している。こうした状況を反映して、2023年のドイツの実質GDP成長率は前年比▲0.3%となり、2024年も引き続きマイナス成長となることが予測されている。

(2) 日本との比較

ドイツの現状は、過去の日本の状況とも比較され得る。日本では特に1985年のプラザ合意以降、円高、労働力不足、貿易摩擦などを背景に製造業の海外生産シフトが進んでいたが、2011年の東日本大震災は製造業の海外シフトを加速させた。日本企業は東南アジアを中心に生産拠点を移転することで一定のコスト競争力を確保したが、その結果、空洞化による国内の雇用や産業

基盤の弱体化という課題に直面せざるを得なかった。一方で日本企業は、国内生産の縮小を補うために、グローバル市場での競争力を高める取り組みを行い、現地での販売網の強化や製品の高付加価値化を進めた。海外進出は、単なる生産コスト削減や逆輸入を目的とした「国内生産代替型」から、現地市場の獲得を目指す「現地市場獲得型」へとシフトしたと言える。このような戦略は、ドイツが現在の危機を乗り越える際の一定の示唆となり得る。

(3) ドイツの政策的課題

ドイツ政府は、エネルギー価格の高騰に対応するために減税や補助金を導入しているが、その効果は限定的である。発電コスト自体の上昇が抑えられていないため、エネルギー価格の上昇が製造業全体に与える影響を軽減するには至っておらず、政治的な不安定性もドイツ経済に影を落としている。FDP 離脱による連立政権の足並みの乱れや早期選挙の実施は、政策決定の遅れを招き、経済全体の低迷をさらに深刻化させるリスクをはらんでいる。

例えば、2024年にはエネルギー多消費産業の稼働率が2019年比で15%低下し、これに伴い失業率も悪化している。シュルツ政権はエネルギー価格抑制策を講じる一方で、EU 全体での連携を強調しているが、国内での具体的な投資促進策は不十分で、国内企業の設備投資額も2023年には前年比で8%減少し、経済全体の先行きに対する不安が広がっている。

(4) 日本への示唆

ドイツの状況は、日本にも重要な示唆を与えている。第一に、産業の根幹のエネルギー供給の一層の多角化の必要性である。日本もエネルギー自給率は低く、特定の供給国に依存するリスクを抱えている。第二に、産業空洞化への対応策として、国内産業の競争力を維持するための包括的な政策が求められている。具体的には、産業用電力価格の抑制や、製造業の高付加価値化を進める施策が必要と言える。

さらに、日本はドイツと同様に製造業が経済の基盤を成しているため、国内雇用の維持や地方経済の振興にも注力しなければならない。グローバル化に伴う地政学、経済安全保障のリスクが高まる中で、日本企業は国内外の生産拠点の役割を再評価し、リスク分散を図る必要がある。また、政治的な安定性を保つことが、経済政策を推進する上で重要である点も忘れてはならない。

ドイツの製造業低迷が示すように、エネルギー戦略の誤算は国全体の競争力を削ぐことにつながる。日本においても、再生可能エネルギーの活用や電力網の強化といった長期的視点からのエネルギー政策が進められているが、デジタル化やカーボンニュートラルを進める中で、同時に各産業の競争力を高める取り組みこそが急務である。

(5)まとめ

ドイツのエネルギー危機と製造業の低迷は、エネルギー戦略の誤算や政治的混乱が経済全体に与える影響の大きさを示している。このことは、日本に対してもエネルギー供給の多角化や製造業の競争力維持の必要性を再認識させる。同時に、日本が過去に経験した産業空洞化の教訓を活かし、国内経済の強靱化を進めることが、今後の持続的成長の鍵となる。またドイツの経験から、エネルギー政策と産業政策の官民連携が経済全体の安定に不可欠であることが改めて認識される。日本はこの示唆を活かし、エネルギー供給や産業基盤の強化に向けた積極的な行動を取らねばならない。(終)

今年は陸上、海上自衛隊の方も参加し、例年以上に厳かな雰囲気となりました。



そして最後の記念写真は、沢山の参加者で全員が収まりきれないほどでした。



根岸外国人墓地での墓前祭

常務理事 大堀 聡

11月30日(土)、戦争中に横浜港での艦艇爆発事故で亡くなったドイツ兵士の眠る根岸の外国人墓地で、墓前祭が行われました。地元の方々に加え、東京横浜独逸学園の生徒が今年も参加しました。日本側で中心的役割を果たした横浜日独協会からは、成川会長以下数名が顔をそろえました。



ドイツ大使館武官室のペルジケ大佐がドイツ側を代表して挨拶をした後、私(大堀)が日本側を代表して挨拶をしました。

続いて中尾台中学校の吹奏楽部が音楽を奏でる中、参加者全員が献花をしました。



フェリス女学院大学学祭訪問

副会長 南雲 淑子

11月4日は、先日横浜日独協会で講演して頂きました高雄準教授のドイツ語の生徒さんたちの発表を見に、山口常務理事、佐藤理事、大堀常務理事、大治理事と緑園都市にあるフェリス女学院大学を訪問しました。まずはスペイン語、中国語グループなどの発表があり、ドイツ語は最後でしたが、さすが高雄先生の生徒さんたちで一番素晴らしい発表でした。とても堂々としていて、音楽家の生徒さんによるドイツ歌曲もお上手で、ドイツにまつわる全てに渡りドイツの良さが良く伝わり、私達も嬉しくなっていました。

その日の朝、校内に入ってすぐに礼拝堂にて聖歌隊の歌を聞いたのですが、きれいな歌声はまるで天使の歌声のようでした。そしてお一人男性も入ってのコーラスも素晴らしいものでした。発表の場にその方もいらしたのでお話ししたら、神戸から転勤でいらしたばかりの音楽科の先生で、神戸では神戸日独協会に入っていたそうです。そこですぐに横浜日独協会にお誘いしたら、次の日には入会なさって下さいました。

このように大変実りあるフェリス女学院大学学祭となりました。



～教育コンテンツとしてのドイツ～

フェリス女学院大学高雄綾子准教授のご講演をお聞きして

理事 佐藤 恵美



まだ残暑の厳しい9月21日(土)、関内にある技能文化会館にてフェリス女学院大学でドイツ語授業を担当されている高雄綾子先生のご講演がありました。

当会は名前の通りドイツやドイツ語に興味関心の高い会員の集まりです。ある意味では大学の授業のように、皆さんが先生のお話熱心に耳を傾けていらっしゃいました。昨今の大学でのドイツ語やドイツ文学の地位の低下は一抹の寂しさとともに認識してきた事実です。第二外国語が必修ではなくなる大学もある中で、先生がどのようにして学生達にドイツ語を学ぶモチベーションを持つよう努力されているか、とても興味深いテーマでした。

ご講演には同大のドイツ語インテンシブコース卒業生で、現在はビジネス界でご活躍の谷内さん、小暮さん、そして在校生の大久保さん、畑中さんもご参加され、若いエネルギーを感じる時間でもありました。

前半のサブテーマは「日本の大学とドイツ語」で、「ドイツ語入門」と「基礎演習」についてご説明いただきました。

まず、フェリス女学院大学では、新入生が英語以外の二つの外国語に触れる「初習外国語入門」という制度を維持しています。ここで、フランス語や韓国語など最近の学生に人気の外国語がある中で、いかに「ドイツに興味を持ってもらうか」、そして「ドイツの魅力」を伝え、第二外国語として専攻してもらうか。または、ドイツ語が新しい言語体験を広げていくことに貢献できるか、という点に苦心している様子が紹介されました。

旅行や音楽、クリスマスマーケットや、地名や人名にドイツ語が多用されている大ヒットアニメを取り上げる。ドイツ映画を観てもらい感想や聞き取れた単語を質問する。また、馴染んだ英語との関係を示すことで学生に安心感を与えるなど、工夫をされているそうです。

その先の「基礎演習」では、必ずしもドイツ語専攻ではない学生たちが、10個の日独のライフスタイルに関わるテーマから好きなものを選びワークショップ形式で調べて発表する、という授業を行っています。たとえば【ワークライフバランス】というテーマでは、「ドイツ人が余暇を楽しむのに比べ、日本人は現実逃避として余暇を使っているのではないか。」といった意見や、【ファッション】や【買い物】では、「ドイツ人は環境のために古着やバラ売りを好むが、日本人は衛生観念が強いので好まない。」といった意見が学生から出たそうです。

面白かったのは【食文化】のテーマで、スターバックスでミルクを豆乳などにカスタマイズする時に、日本は有料だがドイツでは無料。それはドイツではベジタリアンが多いから、という学生自身の観察でした。そのような取り組みから、学生も訪れたことのないドイツの文化を自分なりに咀嚼し、日本とどのように違うのかを説明できるようになったと考えているようです。これは大きな成果です。

このようにドイツを通じて、より豊かな文化経験をしてもらうことを、先生は目標の一つにいらっしゃいます。

第二外国語をめぐるのは、大学での第二外国語必修廃止の背景に、文法や読解が中心の授業が多く、実際に使えるようにならないという批判がありました。しかし第二外国語には、多言語間の共通性を見つける楽しみという利点もあります。文法は暗記するだけのものではなく、母国語や英語の知識に加えて、世界を立体的に捉えるための杭でもあります。ここで、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)が提唱する、部分的な能力でも文化との関係とコミュニケーション能力を重視する「複言語主義」が、第二外国語を捉えなおす際に参考になるのではないかというお話になりました。

後半は卒業生のお二人が、ドイツ留学で感じた歴史を現地を知る大切さや、人種の違いに関する違和感を批判的思考の重要性に昇華したお話。音楽とドイツ語を通してドイツ人作曲家の生きた時代・文化・背景をリアルに捉えることができ、「知ろうとすることの大切さ」を学んだお話をされ、その強くしなやかな言葉に感銘を受けました。また、お二人の在校生は、ドイツ語インテンシブコースの楽しさを動画で紹介し、ドイツ語で視野が広がったことや自分たちで作っていく能動的な授業で充実していることなどを話してくださいました。

高雄先生の4人の教え子が、皆さん生き生きとして楽しく積極的に活動していらっしゃる様子が聞いている私たちも元気にし、日本の未来にも明るさを感じることができました。このようなご講義を受けてみたい！というのが私達聴衆の一致した感想です。日々学生達のことをお考えになり、より効果的なご講義を研究される日々は大変だと思いますが、若い世代のために今後もますますご活躍いただきたいと思います。

高雄先生、素敵なお講演をありがとうございました。



ドイツ人音楽家として 日本の皆様に伝えたい事、広めたい事

世界で輝いたドイツのテノール歌手 Uwe Heilmann 先生の“情熱溢れる講演”

2024年10月19日(土)

港北区民文化センター ミズキーホールにて



会員 池田 悟

成川会長から、例会開催の挨拶に続き Uwe Heilmann 先生の略歴が紹介されました。講演の中で Heilmann 先生ご自身からも生い立ち、今日迄の音楽活動について話されました、その素晴らしい経歴と活動を纏めました。



- ◆ 1960年 Darmstadt (Frankfurt の南約 35km)に生まれる。
- ◆ 8歳の時に Darmstadt の教会の少年合唱団に入り、9歳でソロを受け持つ。
- ◆ 高校卒業までは声楽とサッカーの練習に打ち込む。
- ◆ 18歳の時に素晴らしいテノールが認められ、Detmold Musik Hochschule に進む。
- ◆ 20歳の時(大学時代)、W.A.Mozart「魔笛」のタミーノ役でデビュー。
- ◆ 1985年 Mozart 国際コンクールで、同年は1位無し、2位を受賞、Salzburg 音楽祭に出演。
- ◆ Elisabeth Schwarzkopf 20世紀の最も偉大な声楽家 (lyrick Sopran)に師事。
- ◆ Stuttgart 国立歌劇場専属歌手としてスタート。
- ◆ Austria, Vorarlberg で開催の「シューベルティアード音楽祭」に毎年出演。
- ◆ 27歳の時に Wien 国立歌劇場に出演。28歳の時に New York Metropolitan 歌劇場に出演、続いて Milano La Sacala 歌劇場に出演。
- ◆ 「オペラ界の新星」と評されると、同時に「歌曲(Lied)」の声楽家として名声を博し、世界を代表するピアニストや指揮者とオーケストラの共演を世界各地で行った。
- ◆ 1988年 Detmold 音楽大学の先輩、中村智子（オペラ、歌曲で有名なソプラノ歌手）と結婚。
- ◆ 1996年日本に移住。同年 Berliner Philharmoniker 日本公演で Beethoven の「第九」のソリストとして出演。
- ◆ 1996年～2009年 沖縄県立芸術大学 教授。

- ◆ 2009年～2022年 鹿児島国際大学 教授。
- ◆ 2022年、より幅広い音楽活動を行う為、ハイルマン合唱団とオーケストラを東京に結成。
- ◆ 2023年4月 J.S. Bach の「マタイ受難」を東京で、10月に G.F.Händel の「メサイア」をミュゼ川崎で公演。
- ◆ 2024年11月 J. Haydon の「天地創造」をミュゼ川崎で公演。
- ◆ 来年、2025年4月には J. S. Bach の「マタイ受難」を、9月に F. Mendelssohn B.の「エリア(Elias)」をミュゼ川崎で公演予定。

『ドイツに生まれ 1996年に日本に移住するまでの約35年間は「音楽の神ミューズ」から授けられた「テノール」の研鑽に励み、多くの人々からのを支援、協力を受けて成功し、世界的な名声を得る事が出来ました。此からの20年間(85歳まで)は「ミューズの神」からの賜り物を日本の若い世代の人々、音楽家の皆様に引き継ぎたく考えて居ります。

日本に移住後の沖縄での13年間は全くの別世界に来た様でした、その後2022年までの13年間は鹿児島の大学、東京芸大、国立音大、洗足学園、名古屋音大、エリザベト音大広島で声楽科の数多くの学生を教え指導し、海外の大学への留学にも積極的に協力して来ました。嬉しいことに今ヨーロッパの歌劇場で活躍している教え子が何人か居ます。

ドイツやヨーロッパには教会付属の聖歌隊や長い歴史を持つ「少年合唱団」が有り、多くの世界的に有名な声楽家は子供の頃からその様な合唱団で練習し音楽の基礎を身に付けます、又、各都市にはオペラ劇場と、それに付属した合唱団やオーケストラが有り、そこには世界中からトップクラスの声楽家、音楽家が集まり活躍しています、その演奏会を聴く機会も多く、厳しい競争、実力の世界を知る事ができます。

日本の声楽家とその様な厳しい世界で競争し活躍してゆく事は本当に大変な事です。しかし、ピアノやバイオリン他器楽では多くの優秀な日本人の世界的奏者が輩出、活躍中です。

私は声楽の世界に於いてもそれが実現出来ると思ひ、ドイツでの約35年間、沖縄と鹿児島、日本各地での約30年間に学んだ事、経験して来た事を声楽家の皆様、日本の方々に教え、伝えたいとの思いで、2022年に Heilmann 合唱団&オーケストラを東京に設立し幅広い活動を開始しました。

新しく始めた活動を通して「ドイツの音楽の真髄」を伝える事が出来ればと思っています。そこでは音楽のみならずドイツの文化(文学、演劇、他)芸術全般についても、私がこれまでに培って来た事をアマチュア、セミプロ、プロを問わず日本の皆様に伝える事が出来ればと考えています。

ドイツ学園オクトーバーフェスト

副会長 南雲 淑子

日本に住んで約 30 年、日本の自然（空、海、森）の素晴らしさを知ると同時に日本人の「立ち振る舞い」謙虚さ、気遣い、勤勉さ、配慮、時間に正確(Pünktlichkeit)、等々に感心して来ました。日本の長い歴史と文化からこの様な素晴らしい事が自然と身に付いたものと理解します、本当に素晴らしい事です。

この様な皆様と日・独の文化交流が出来、永く続く事を願っております。日本とドイツは 150 年以上の文化交流が続いています。今後その交流をさらに深め次世代に引き継ぐ事が我々世代の役目だと考えています。

私は、世界で活躍中の音楽仲間を日本に呼ぶ事は出来ません。しかし合唱団やオーケストラの団員を集める事は私にとって大変難しい事です。新しい合唱団では男性の団員が少なく一人でも多くの方の入団を願っています。皆様のご協力、ご支援をお願いします。皆様、一緒に歌いましょう！音楽で皆様と喜びを分かち合いましょう！

私の夢は、最後の集大成として團伊玖磨作曲のオペラ「夕鶴」を上演したく思っています。鶴の恩返しが自分のイメージにもピッタリです。

此からも“ガンバッテ” やって行きます。』

講演の中で、ドイツの 13 世紀頃の「愛の詞」作者不明を古語と現代語で紹介が有り、先ず古語で：

Ich bin Din
Du bist Min
Verloren ist das Schlüsselin
Musst auf ewig drinne sin

次に現代語で：

Ich bin Dein
Du bist Mein
Verloren ist das Schlüsselein
Musst auf ewig drinnen sein

又、Heilmann 先生のテノールで、R. Schumann 作曲、Heinrich Heine の詩“Dichterliebe” の出だし

Im wunderschönen Monat Mai！を歌われ、

続いて、日本の曲も歌いたいですねと、三木露風 作詞 山田耕作 作曲の“赤とんぼ” の出だし

“夕焼け小焼けの赤とんぼ” を歌われました。

講演は全て日本語、マイク無しで Heilmann 先生の素晴らしいテノールで行われました。



秋晴れの 10 月 12 日、ドイツ学園のオクトーバーフェストに参加致しました。参加者は、フェリス女学院大学の学生さん+卒業生の 4 人と山口常務理事でした。ドイツ学園では広い校庭の周りにビール、ヴルスト、プレッツェルをはじめいろいろなものを売る店が並んでいました。

校庭の中央には長テーブルとベンチが並び、ドイツのオクトーバーフェストそのものの雰囲気です。校舎に近いスペースでは生徒たちが水、飲料、綿菓子、輪投げ遊び、顔や腕などにペイントするコーナーなどの店を開き、そこだけはまるで日本のお祭りのようでした。

私達はまずビールで乾杯し、ヴルスト、プレッツェルを頂き、私のドイツ人の友人（ドイツ学園にお子さんを通わせている）も加わり、文字通りの日独交流の場となりおしゃべりしました。ドイツ人のお母さんたちは、皆さん南ドイツの民族衣装を着てさらに雰囲気を盛り上げていました。



また会場ではくじも売っていて、ドイツへの航空券が当たるといので 1 枚 1000 円でしたが私達もこぞって買い、ひと時ドイツ旅行の夢を見ました。

その後、校内のカフェコーナーで、お母さんたちの手作りクーヘンとコーヒーを頂き、さらにドイツを味わいました。残念ながらくじは外れてしまいましたが、オクトーバーフェストを満喫した楽しい一日でした。



11月講演会

「2024年 ドイツの秋」



一日独関係の新たなる可能性—
を拝聴して

監事 能登 崇

講師ゲオルグ・ロエル氏 (Georg Löer) は1955年東京生まれのドイツ人です。少年時代をドイツやネパールで過ごし、1968年ドイツへ移住し高校・大学卒業後、金融関連業務に従事しフランクフルト、東京、ジャカルタ、香港、上海等で勤務された後、2007年から2024年までの17年間ドイツ NRW 州経済振興公社日本法人社長を勤められ、本年より氏が2006年に設立したEURO-JAPAN Corporate Advisors Inc. に代表として戻り、まさに世界を駆け巡る国際ビジネスマンとしてご活躍です。



演題の「ドイツの秋」は季節としての秋ではなく、氏はこの中に現在のドイツに見られる「不安と混乱の秋」を捉えています。70年代後半の氏の学生時代も様々なテロ事件のあった「ドイツの秋」、80年代後半のベルリンの壁崩壊前後の政治的、社会的な出来事を指しています。具体的には政局、安全保障、防衛、自由貿易、気候変動、法制度、人種差別などの諸問題で、一つひとつ事例を挙げて説明されました。

更に氏は最近の世界情勢に目を転じ、先ず中国は「世界の工場」から、主要な産業・技術・軍事大国・再生可能エネルギーや電気自動車分野のリーダーへと進化し、これは米国、日本、ドイツ、EUにとり大きな挑戦と見做しています。米国はトランプ氏が「アメリカを再び偉大に」や「米国第一」のスローガンで支持を増やし権力を強化するものと思われます。対外的には関税や貿易障壁を利用して米国経済の優位性を確立し、新たな経済的繁栄を目指すでしょう。またEUとヨーロッパは、ロシアによるウクライナ侵攻および旧ソビエト連邦崩壊後に失われた領土を取り戻そうとするロシアの試みに直面し、ハイブリッド戦争の状態にあると考えます。日本については新首相が誕生したが、直近の衆議院選挙で自公連立政権が安定多数を失いその結果、野党の協力を必要とする場面が増える可能性が出てくるのではないかと、ただこれは民主主義にとり必ずしも悪いことではないと観ています。

昨今の「ドイツの秋」は不評であった連立政権 (SPD、緑の党、FDP) が終了し、2025年1月に予定される総選挙を控え大きな変化が起きています。最近の州議会選挙で見られるように「ドイツのための選択肢(AfD)」や「ザラ・ヴァーゲンクネヒト連盟(BSW)」のような政党が、政治的風景を大きく変える可能性を秘めています。また工業輸出大国であるドイツは、歴史的には企業や地理的条件を通じてロシアとのエネルギー取引に深く関わって来たが、ウクライナ戦争によりその状況が一変しています。その結果、EUのグリーンディールや「大胆な進歩を追求し、自由・公正・持続可能性のための連合」という期待を込めてスタートした連立政権が、ウクライナ戦争、エネルギー危機、高インフレ率、移民問題そして絶え間ない内部対立問題により本年11月に瓦解したのです。

経済面で更にコロナ禍による景気後退を経て、経済の減速化とマイナス成長が予測され、2025年以降も改善の兆しが見られない状況です。消費と輸出の伸びも欠如しています。

ドイツの自動車メーカーやその部品製造会社についても大規模なリストラに追い込まれています。加えて地政学的な対立、国の高い債務状況、移民問題、老朽化したインフラ、産業構造の変革等が民主主義の基盤を揺るがし、国民の不安を煽っていると見ています。

このような脅威に対して、日独両国は勿論、NATOやアメリカ他の民主主義国家が勇気と行動力を持って対応することが求められているのではとロエル氏は強調されています。

* 上記内容には、講演会後に有志との会合で示された氏の見解の一部を含んでいます。



ハンブルグ独日協会・さくらの女王の来日

副会長 向井 稔

財団法人「日本さくらの会」の公式招待を受け、さくらの女王が当協会の友好協会である「ハンブルグ独日協会」より、ハンブルグ州日独親善大使として来日されました。



左から向井副会長、ハンブルグ、日本、フィンランドの桜の女王

今回は橋丸会長、クラウス事務局長そしてスカーレット・ターナー「ハンブルグさくらの女王」の3名での公式訪問となりました。首相官邸への訪問、さらに「日本さくらの会」設立60周年記念事業への参加、またハンブルグ市長からの親書を携えての両横浜市長・大阪市長への表敬訪問等々極めて多忙な予定の中、9月17日に横浜へお越し頂くことになりました。



ポトマック河畔の桜植樹に貢献したシドモアさんのお墓に墓参

歓迎会は横浜・港の見える丘公園に隣接する「KKRポートヒル」を会場に、「シドモア桜の会・横浜」とご一緒に合同開催の形で行うことになり、そこには日本の「さくらの女王」を始め、フィンランドからの二人の「さくらの女王」も参加を頂き、総勢30名を超す非常に華やかな雰囲気の中で、盛大に執り行うことが出来ました。



なお当協会からは約10名で参加、特に最近入会した神奈川大学一年生の中山さんもそれぞれの桜の女王と若者同士、気軽に親交を深めてくれました。

「多文化フェア@なかやま」に参加して

常務理事 山口利由子

音楽やダンス、料理などを通じ、さまざまな国の文化への理解促進を目指す「多文化フェア@なかやま」が10月6日(日)、中山地区センターで開催されました。主催は同地区センター、協力・みどり国際交流ラウンジでした。

3階ではさまざまなステージパフォーマンスが行われ、日本ウクライナ芸術協会によるバイオリンやピアノの演奏、インド舞踊、アフリカンヘリテージコンサート、サンバ舞踊等が披露されました。また、多文化共生や国際協力などの分野で活動する市民団体などの紹介のほか、レーザーカッティングや木工などのアート体験もできました。横浜日独協会も机を並べて、会の紹介をしました。



ブラジル料理「フェジョアーダ」



クリスマス会 (2024.12.14 霧笛楼)



文化委員会企画

教養講座「日本文学逍遥」

【日時】原則として毎月第1水曜日 13:00～14:30

- ・1月8日(水) **百人一首かるた会**
神奈川県民センター604室
(横浜駅西口徒歩5分、午後1時～3時)
- ・2月5日(水) オンライン講座
- ・3月5日(水) 「春の鎌倉散策」のため休会
- ・4月2日(水) オンライン講座

【講師】寺澤行忠常務理事(慶応義塾大学名誉教授)

春の鎌倉散策

文化委員会

早春の一日、鎌倉を散策したいと思います。

【日時】2025年(令和7年)3月5日(水)

【場所】鎌倉 報国寺・浄妙寺

【集合】10時 鎌倉駅東口

ご参考(横須賀線利用):

横浜駅 9:21→保土ヶ谷 9:24→東戸塚 9:29

→戸塚 9:33→大船 9:45→鎌倉 9:51

・鎌倉駅東口 10:05 発 京浜急行バス 鎌倉霊園太刀洗行に乗車(4番乗り場)、浄妙寺下車

・10:30～11:30 報国寺(竹の寺)庭園散策

・12:00～13:30 浄妙寺庭園散策

境内の「石窯ガーデン」にてランチ
石窯プレート(チーズ・キッシュ・コロレ
ヌ・日替わりパン・副菜・スープ・プ
チデザート・ドリンク) 税込¥3,000

・14:00～14:40 一条恵観山荘(重要文化財)庭園散策

・14:49 浄妙寺バス停から鎌倉駅行に乗車

鎌倉駅周辺の喫茶店でティータイム、のち解散

【参加申込】2月28日(金)までに、中尾尚末文化副委員長へお申込み下さい。

E-mail: naomint2013@gmail.com

イベント予定

■2025年1月 イベント:

- ・日時: 1月18日(土) 15:00～16:30
- ・会場: 横浜市技能文化会館 802大研修室
(JR関内駅より徒歩5分)
- ・講師: 羽田功氏 学校法人横浜商科大学学長、
慶應義塾大学名誉教授
- ・演題:「都市とユダヤ人」
フランクフルトを中心にドイツ圏の都市とユ
ダヤ人の関係について語っていただきます。
- ・参加費: 1,000円 会員以外の方も参加できます。

■2月 イベント:

- ・日時: 2月15日(土) 15:00～16:30
- ・会場: 川崎市総合自治会館 大会議室1
(武蔵小杉駅より徒歩2分)
- ・講師: ステファン・ブッヘンベルゲル氏
神奈川大学教授、横浜日独協会会員
- ・演題:「カール・ヴァレンティン(Karl Valentin)の世界」
コメディアン、カール・ヴァレンティン(1882-1948)は、国
王ルートヴィヒII世や作曲家リヒャルト・シュトラウスとい
った歴史上の人物と並んで、ミュンヘンで最も有名な
人物の一人です。彼とその作品について紹介します。
- ・参加費: 無料 会員以外の方も参加できますが、会員
優先となります。

■3月 イベント:

- ・日時: 3月15日(土) 15:00～16:30
- ・会場: 未定
- ・講師: 寺澤行忠氏 慶應義塾大学名誉教授
横浜日独協会常務理事
著書『西行:歌と旅と人生』第78回毎日出版文化賞
(人文・社会部門)受賞
- ・演題:「西行そして定家」
西行と定家は、新古今時代を代表する歌人です。対照
的ともいえる歌風ですが、両者はともに相手に対し、深
い敬意を払っておりました。その内実を読み解きます。

新入会員: フェリス女学院大学様 次郎丸智希様

認定NPO法人横浜日独協会会報 発行 2025.1.1 (第73号)

所在地: 〒247-0007

横浜市栄区小菅ヶ谷 1-2-1 地球市民かながわプラザ

NPOなどのための事務室内 事務局: 津澤

Tel: 080-7807-7236

会報編集責任者: 山口 利由子

E-Mail: riyuko.yamaguchi@gmail.com

横浜日独協会ホームページ <https://jdgy.sub.jp>



法人会員

株式会社文芸社 ウィンクレル株式会社 ボッシュ株式会社 トルンプ株式会社 公益財団法人登戸学寮
ワインブティック伏見 モトスミ・ブレイメン通り商店街振興組合 横浜国立大学ー成長戦略研究センター
株式会社コトブキ 神奈川大学 ケルヒャー・ジャパン株式会社 一般社団法人如水会 横浜支部 日独産業協会(DJW)
キャリア・デベロプメント・アソシエイツ(株) 富士・フォイトハイドロ株式会社 日本パウシュ株式会社 フェリス女学院大学